平成 26 年度　在外教育施設派遣教員帰国報告

『タイ・バンコクでの 3 年間。生活と仕事と雑感』　（タイ・バンコク日本人学校）

紋別市立紋別小学校　増田　英志　　E-mail　masuda.eishi@gmail.com

はじめに

私は平成２３年度から２５年度までの３年の間、文科省からの在外教育施設派遣教員派遣教員としてタイ王国、バンコク日本人学校に派遣されることになりました。

これから述べることは「私」である一教員がタイ.・バンコクのある一角で生活、勤務し、あるいはタイ王国の諸地域を歩くなかで見聞し、感じたことを記した私見です。ここに書かれている内容が一般的な感情や実情とは必ずしも一致してものではないということをお断りしておきます。

作成に当たり、部分的に、インターネットや資料などを引用、または参考にしました。

《在外教育施設派遣を希望したきっかけ》

私は３０歳半ば、「外国」への興味を募らせた。理由は「このまま日本しか知らないで死にたくない。」である。やがて、その思いは膨らみある年が明けた１月、航空券を買って一人、旅にでた。その初めて海外がタイだった。その日、到着した夜中のドンムアン国際空港（現在はスワンナプーム国際空港にとってかわった。）で私はおじけづき、空港から３時間くらいでることができなかった。

それから、毎年、冬の長期休業に海外に足を運ぶようになった。行先きは金銭上の都合からアジアばかりであったが、外国に行くといつもそこには「日本」という物差しでは測ることのできない街並みや服装、言葉、木々や草花、匂い、文化・風習、宗教、人々の気質、考え方などあらゆる事物が横たわっていた。こうしてみて感じたことを日本に持ち帰り、世界と日本の物事の差異を子どもたちに語ることはとても大切なことだと思うようになった。

また、私の歩いたアジア諸国はその国独特の雰囲気やたたずまいを見せていたが、その、どの国も、街並みの中には必ず日本企業の看板や車、その他いろいろな「日本のもの」が溶け込んでいた。

日本は経済大国といわれるようになって長い年月が経つが、まさにその言葉を目の前の光景が証明していた。これまで、そして現在も多くの日本人が外国で活躍し、世界の経済を支えきたことを実感し、日本人として、とてもうれしく思った。

文化的差異、国際的協調、日本人としての誇り、こんなものを子どもたちに伝えていく必要がある。私はそのように強く感じるようになったのである。このような思いが国際理解教育に興味を抱かせ、ひいては日本人学校で働くことへの関心を強くしていった。

私はまず、国際理解研究会に所属し、派遣経験者の話などを聞く中で、国外に駐在する子女の教育に関心を抱くようになった。こうして在外教育施設派遣教員への挑戦が始まった。

３回目に道教育委員会の面接までいったがだめだった。そして我が子の成長との兼ね合いで最後と決めた５回目に文科省面接を通過し、派遣登録となった。派遣されたのは長男が中２、次男が小学校入学の年だった。

《なぜ、派遣先がバンコクだったのか？》

これから派遣される先生の中にも私のように派遣中のお子様の進学等について心配されている方もいると考え、そのことについて記しておきたい。

ご存じのとおり、派遣にはいわゆる即派遣と登録派遣があり、前者は確か１１月ごろに派遣先が決定され、年明けの４月に派遣となる。後者は派遣登録後、派遣先の決定は向こう一年を待つことになる。私は内心、南米やアフリカを望んでいだが、ふたを開けてみたら、初渡航であるタイ・バンコクであった。これは正直、少々拍子抜けであった（３年間住んですっかりタイ国の虜になってしまうのであるが）。

「バンコク日本人学校」は日本人学校としてが最も古い歴史（大正 15 年開校、戦後 1946 年１月に廃校を経験し現在に至っている）をもつ。そして、児童生徒数も世界一である。タイ・バンコクは邦人進出企業も多く、邦人人口は４万とも８万（実際にはもっといるはずである）ともいわれ、日本人居住区は日本料理店が並び、日本人が住みやすい商業的繁華街として栄えている。

私は文科省の面接で派遣先については「一任」という覚書を提出していた。しかし１年待ちの登録派遣の私たち家族にとっては一つの大きな問題があった。それは「長男の進路」である。

文科省派遣教員の派遣期間は通常３年。この計算で行くと派遣された年に中２の長男は帰国時には高２。つまり、海外で高校進学、さらに、本帰国する際には日本の高校の編入試験を受ける必要があった。

このことについては派遣先が決定される前に文科省に求められ要望を書いて提出しておいたのである。バンコクは前出のように日本人が多く、日本人学校は大規模校で進路情報も豊富だ。塾産業も大きな需要があるので大手も含めたくさんの塾が進出している。

おそらく、文科省の方が私たちのそんな問題に配慮してくれバンコクとなったのではないかと思っている。

１タイ・バンコクについて

（１）タイ王国の基礎データ

タイ王国（Kingdom of Thailand）

《面積》51 万 4,000 平方キロメートル（日本の約 1.4 倍）、《人口》6,593 万人（2010 年）（タイ国勢調査）、《首都》バンコク、《民族》大多数がタイ族。その他，華人，マレー族等《言語》タイ語《宗教》仏教 94%、イスラム教　5%、《政治体制》立憲君主制《元首》プミポン・アドゥンヤデート国王（ラーマ９世）

『外務省、基礎データより抜粋』

（２）タイの歴史と発展

タイの歴史と発展についてはタイ王国政府観光庁から出ている説明が短く、とてもわかりやすい。

華やかな大都会の賑わいと、厳かな仏教文化が息づき、古今の歴史と文化が見事に調和した都市、バンコク。1782 年、ラーマ１世によってこの地へ遷都されて以来、タイの政治・経済・教育・文化の中心であり続け、近年ではさらに「東南アジアのハブ」と称される先進的な国際都市へと成長を遂げました。しかしバンコクの魅力は、そのようななかにあっても、そこかしこに人々の暮らしの息づかいを感じられるところにあります。モダンな高層ビル群や巨大なショッピングモールの足元には、屋台での買い物や食事を楽しみ、道すがらの小さな祠に手を合わせる人々の姿が見られます。もちろん美しく荘厳な王宮や仏教寺院の数々が密集する旧市街のラッタナコーシン島でも、ひとたび路地へ足を踏み入れれば、昔ながらの静かで素朴な庶民の生活が広がっています。

『《タイ国政府観光庁》ＨＰ』より

タイ王国の首都、バンコクは、ネイティブの間では通常「クルンテープ」と呼ばれる。この名前は実は略称であり、正式名称はやたらと長い。その長さは世界一といわれる。以下に記す。

〈バンコクの正式名称〉

“クルンテープ・プラマハーナコーン・アモーンラッタナコーシン・マヒンタラーユッタヤー・マハーディロックポップ・ノッパラット・ラーチャタニーブリーロム・ウドムラーチャニウェートマハーサターン・アモーンピマーン・アワターンサティット・サッカタッティヤウィサヌカムプラシット”

日本語訳

「天使の都　雄大な都城　帝釈天の不壊の宝玉　帝釈天の戦争なき平和な　偉大にして最高の土地　九種の宝玉の如き　心楽しき都　数々の大王宮に富み　神が権化して住みたもう　帝釈天が建築神ヴィシュカルマをして　造り終えられし都」

タイの小学校では全員が暗唱させられるそうだ。私が出会ったタイ人の多くは「タイ対人として当たり前」と語った。日本人学校の児童の中にもお母さんから教えられ暗誦できる子がわずかながらいた。

（３）タイの国民性

タイのとある街に立ち、タイ国民の行動を眺めていて、まず感じるのが宗教に対する念が非常に深いということである。多く人々は仏教を信心しているが、バンコクでも頭から布をかぶっている女性も普通に見るので、イスラム教の信者も多いのだろう。統計的には９４％が仏教を信心しているが、一般に南部に行くとイスラム人口が増えるといわれる。南部では現在も独立活動を行っているようである。

挨拶は手を合わせ、合掌（ワイという＝感謝するという意味）をする。この仕草は日本ではお寺にお参りするときだけしかしないが、タイでは人への挨拶でも行うのがしきたりである。きっとこれは仏教からきているにちがいないと勝手に思っている。

街のいたる所には仏像やヒンズー教の神様の像がきれいに磨かれ安置されている。そこを通るタイ人は誰しもが必ずワイをして通り過ぎる。車やバスに乗っている人でさえ、10 代のきれいに着飾った今風の少年少女でさえ、ワイをしないで通り過ぎる人はいない。しないで通るのはファラン（欧米人）や日本人などの外国人だけである。屋台商人などは営業を始める前に必ず皿にいれたお供え物を像の前に備えてから営業を始める。

バンコクの中心的商業施設であるワールドセンター前の一角にはヒンズー教の神、シヴァ神（破壊の神であり、恋人探しの神でもあるとも聞いた。）が安置されている。その前には裸足で真っ赤なバラを供え、ひざまずいて何度も頭を地面にこすりつけるようにして祈る若い年頃の女性が絶えない。それほど、仏教に対して信心深い国民性なのである。

また、タイ王国には王様（ラーマ９世＝タイ人は一般になまって「パラムガオ（ガオ＝９）」と呼ぶ。固有名はプミポン王）がおり、国民の誰もがこの王を心から信奉している…そのような雰囲気やたたずまいをタイのどの街を訪れても感じる。現地の学校や官公庁には必ずプミポン王や王家の人物写真が飾られ、デパートには巨大な王様の宙づり看板が設置され、また、庶民の家を訪れても（これは都会でも国境近くの田舎でも）一番目立つ壁に王様の写真が飾られている。その家庭の多くが、王宮家の写真やプミポン王の幼少期からの成長し現在に至るまでの写真を飾るなど、王様を親密に信奉する愛を感じるのである。聞けば、タイ人にとって特にラーマ９世は明治天皇と同時代に活躍したラーマ５世と並んで、特に人気があるそうである。さまざまな活動の中で失墜した王家の権威を取り戻した方でもあるということだ。二十歳前後で王位に就かれ、現在８６歳になる。最近は病気がちとなり、入退院を繰り返され、国民は心配している。あるタイ人のタイ語の先生などは王様が入院されるたびに心配し泣いていた。

また、全国の官公庁や交通機関、国鉄、ボアランポーン駅（日本で言う東京駅）、ルンビニなどの大きな公園では朝８時と午後６時に国歌が大音響で流れる。通る人々は王様に敬意をはらい、その場に直立不動で立ち止まる。これは初めての外国人とて同様である。私はいつもこの情景に出くわすと神聖な気持ちになり、タイの固有の文化を感じていた。

タイ国の政治的対立はいったん燃え上がると激しく燃え続けるというが、プミポン王は介入しない。しかし、タイの軍は王様の直属の軍である。対立が激化して収拾がつかなくなれば、

最終的に軍が介入し、クーデターという形で軍が臨時的に政権を握ることもある。軍は王様のものなので軍に対しては誰もが文句を言えない。そんな構造がタイの政治的な仕組みの中にあるようだ。

（４）３年間のタイでの日常

私が渡タイする以前からタイの報道を見ていると、きな臭い騒動が絶えなかった。そのひとつがバンコクの国際空港スワンナプームでの１ヶ月にわたるデモによる占拠事件テレビには黄色のＴシャツを着た人々が大勢、空港のフロアーに座り込んでいるのを観た。また、数年後はスクンビット通り（東京で言えば青山通り原宿付近、札幌で言えば大通りテレビ電波塔付近のようなところ）でデモがエスカレートしてデモ隊と軍が衝突、この事件で伊勢丹の入っている商業施設が放火され、日本人カメラマンが流れ弾に当たって死亡している。この騒動もテレビに映し出された。この事件のときはデモ隊は赤いＴシャツを着ていた。

スワンナプーム空港占拠事件が 2006 年。スクンビットのデモで日本人の報道カメラマンが流れ弾に当たって死亡した事件が 2010 年。そして、翌 2011 年が私の赴任した年となる。

赴任した当時、年次の先輩教師が「この国は毎年何かしらある。今年もきっとあるぞ」とまことしやかに言っていた。「そう毎年あってたまるか」と内心思っていたらやっぱり来た。２学期のまさに運動会練習が始まろうとしていた時期に。洪水騒動である。１学期の終わりくらいからタイのニュースで東北（＝イサーンといい、土地柄、ラオス系タイ人が多く住む地域）や北部の地方で洪水のニュースが報道されるようになった。ここまでは例年のことらしかったが、その年は雨量が特に多かったようだ。洪水はじわじわとタイ湾に向かって南下してくるというわさがたった。はじめちらほらだったニュースは８月にはいると、連日、いつテレビをつけてもやっている状態になった。バンコクにも洪水がやってくるというわさに真実味が帯びてきた。街では玄関にブロックを積みコンクリートで固めた塀を作り始める家や会社が出始めた。

夏休み明けの９月にはこんな事件が起きた。洪水はすでにバンコクのすぐ北の街までやってきていたが、政府は中枢機能が集中するバンコクには洪水を入れないという作戦だった。そのためバンコクにつながる関は開けなかったのである。これに怒ったのがバンコクのすぐ北の住民である。しばらくは辛抱していたが、とうとう限界の尾が切れた。耐えきれなくなったその地域の住人は関を強行的に空けてしまったのである、それで、軍との間ででいざこざが始まったりした。

その後バンコク近郊の日本企業が多数進出するアユッタヤーという地域がしとどに洪水に見舞われた。水深 3M にもなる洪水だったそうである。今でもアユッタヤーの郊外に行くと、壁にその水面のあとを確認できる。

そのころになって、日本人学校も「ついにきたか！」ということになった。１０月の中旬ころのある日、中休みに突然、職員緊急招集がかかった。「とりあえず、明日から金曜まで休校とする。」という校長からのお達しであった。

その日は午前中で休校、バスが配備され次第、一斉下校ということになった。児童生徒の登下校はほぼ全員がバスである。その日の下校時に偶然スコールが重なった。おりしもその日は「日本人学校休校」を報道しようとテレビカメラが

取材に来ていた。大雨の中、先生たちが並んで傘を数珠つなぎにし、その中を子どもたちが通ってバスに乗り込んでいる。その中の一人に私がおり、大きめに映ったのであろう。

その様子はその日のうちに日本でニュースにとなったらしい。偶然、それを見た東京のある職場にいた実弟が、「うちの兄貴がこの学校に今年から勤めているんですよ」といったとたん私がテレビに映り、「あっ、こいつです！」と驚きながら弟の同僚たちに紹介した。ということを後になって聞いて笑い話になった。

ということでその日から、学校は休校になり、結果的に１カ月以上続くことになる。運動会練習がまさに始まったばかりのときだった。連日夜遅くまで打ち合わせをし、グラウンドに線を引き準備をした運動会練習は中止となり、その数週間後、運動会そのものが中止と判断された。

洪水が来るとなると一番怖いのは感染症というわさが流れた。児童生徒と家族（母親）は休校が決まると、一斉に一時帰国を始めた。企業が命令を出す家庭も多くあったようだ。お父さんだけおいて母子で帰るのである。結局、ほとんどの児童生徒が帰国をした。バンコクの街からは日本人の女子どもの姿が消えた。その日から数日は私も家でボーっとしていた（校長から自宅待機を命ぜられた）。

その後、出勤したが当然、授業はなく、何をしたかというと、児童生徒の帰国先の小学校で「体験入学」を受け入れてもらうための書類作りに追われることになった。保護者から送られてくる申請書を元に書類を作り先方の小学校に送るのである。本帰国となる児童が出たりして退学書類やら成績証明書やら書類は多岐にわたった。とにかく連日書類を書き続けた。学校でやったことといえば、これしか印象に残っていない。むなしく思った。その後も自宅待機になったり出勤になったりしながら時間だけが流れた。数週間後、バンコクに残るわずかな児童生徒の学ぶ場所がほしいという要望がでて、臨時的に学校を開けることになった。この時期になっても依然、ほとんどの児童生徒は一時帰国中であったから、正式な授業は出来なかったのだ。つまり、教科書を先に進めることはできなかったのである。

そんなこんなを経て、11 月下旬、ようやく学校再開の運びとなる。しかし教員にとっても子どもにとっても大変なのはこれからだった。その最たるものが、遅れた分のカリキュラムを取り戻すということである。行事は運動会は中止になったが合唱コンクールや卒業制作、スポーツ大会、３学期には卒業式がまっていた。

それら見直し、授業日数の中で調整しなおし、且つ、教科書の遅れも全てこの中でやらねばならなかった。プロとしてそれをこなすことは当たり前とされた。

年度の終了まで全て土曜日登校、５時間授業となった。これは児童生徒、教員ともにきつかった。子どもは週末になると疲れた表情を見せ、教師は短期間で教科書をすべて終わらせなければならないというプレッシャーを背負うことになった。

結局、日本人学校をはじめ日本人居住区であるスクムビット通り界隈には洪水は来なかった。学校の校門や裏口には土嚢が高く積まれ、商店街や民家はどの家も玄関の周りを水が入らないように 50 センチほどの高さでセメントを塗り込んだブロックが作られていた。店や家に入る時はこれをまたいで入るのである。これがタイのこの時期の社会現象となったが、騒動が過ぎるとともにこれも消えていった。。

２年目は幸いにして何もなかった。そして３年目、また、きな臭い事件が起きた。2013 年の 11 月ころからデモ隊が街で徒党を組み街を練り歩くようになり、その集団は瞬く間に増えてデモはエスカレートしていった。

こうして、スクムビット通りなどの主要な交差点はこのデモ隊が座り込み、交差点のど真ん中に仮設のステージを建て車の交通を完全にシャットダウンしてしまった。

このことは本校のバスで登下校をする児童生徒への影響は測り知れないと考え学校は様子を見て数日は休校にした。しかし、バスはデモが行われている交差点を迂回する事が出来たのか学校はその後、休校措置をとることはなかった。

とはいえ、生活面での影響は甚大であった。デモが連日連夜行われている周辺にマンションがある児童などは引っ越しを余儀なくされたところもあったようである。

「デモには近づいてはいけない」という注意が厳しく言われた（デモ反対派が爆弾を投げ込んだり発砲したりして子どもを含む数名のデモ参加者が死傷していた）。しかしバンコクの商業的中心地であるワールドセンター（伊勢丹や紀伊国屋が入っている）前やルンビニ公園などバンコク都民が最も集まる場所での大規模なデモが行われているのである。近寄るなということがどだいだったようである。

交差点には大きなステージが架設され、連日コンサートやシュプレッヒコールが繰り返されていた。しかもそれが 24 時間夜通し続くのである。デモの参加者は田舎から出てきて道路にテントを張って寝泊まりしている。４車線道路はデモ参加者のテントやＴシャツなどを売る屋タイで埋め尽くされまるでお祭り騒ぎだった。舞台の前には数百人、いや、数千といった集団が出来上がっていたのではないか。マッサージの屋台まで現れ、なんともタイっぽい風景を醸し出していた。

そこまで大きくなっているとは思っていなかった私も「近寄ってはいけない」という注意を遵守していたが、ある日、買い物に出かけ、この光景に出くわした。いつも利用しているボートバス（ルアック・ロット）から降り、橋を上がり、ワールドセンターに続く交差点を渡ろうとしてビックリした。まさにそこはデモ会場の渦中であったのである。それくらいデモがバンコク市内で活発に頻繁に行われていたのである。

このデモのなぜ起きてしまったのか、その経緯を簡単に述べておく。

タイには政治的にシンボルとして赤い色のＴシャツを着ている赤組（「反独裁民主戦線（UDD，通称赤シャツ）」）と、黄色のＴシャツを着ている黄組（「人民民主連合（PAD，通称黄シャツ）」）の２つがライバルとして闘争を繰り広げてきた歴史を持つ。前者は地方の農家の人々が多く支持するグループ、そして後者は都会のビジネスマンなど、いわゆるホワイトカラーの仕事に就く人々が多く支持するグループであるとのこと。

この大きな二つの勢力の政治権力の取り合いを続けてきた。前出のスワンナプーム国際空港の占拠事件は黄色組が、スクムビットで日本人死傷者がでた事件は赤組が起こした事件である。

私が赴任した年の７月、赤組のインラックという40代の女性が選挙に圧勝し首相となった。齢は私とほぼ変わらないのに彼女はとても若く見え、しかも美人である。当時、アジア初の女性首相ということで注目された。しかしこの政権はいわくつきで、彼女のお兄さんがタクシンというとっても強い政治力とお金を持っている人であり、前の前くらいの首相をやっていたのだ。彼は首相当時、外遊中に軍事クーデターを起こされ失脚、しかも裁判所から別の事件で違憲の判決が下り、帰国すれば、拘束される身となってしまった。現在も帰国できずにドバイにいるらしい。

インラック政権はこのようないわく月の下でスタートした。野党より 100 近く多く議席を取った彼女の政権は幸先よくスタートを切った。洪水の時の対応もまずまずだったし次々と画期的な法案を成立させていったのである。しかし、とんだ落とし穴があった。法案を成立させる中で黄組みの気持ちを逆なでするような法案を成立させようとしてしまったのである。それがい

わゆる「大赦法案」、罪人を恩赦により無罪にする法案である。

つまり、この違憲判決により帰れないでいる兄に胸を張って帰国してもらうための、兄タクシンのための法案という魂胆がみえみえだったのである。法案を下院議会で強行採決したとたんに黄色組が怒りをあらわにした。こうして反政府運動として、デモ活動をエスカレートさせていったのである。

インラック首相はあわてて善処し、解散選挙まで行ったが時すでにおそし。この時点が私が本気国する直前の２月の事である。私が帰国した後、裁判所は選挙の無効を言い渡し、人事での重大な過失があったとしてインラックを政権からおろした。その後、とうとう戒厳令が敷かれ、軍が事実上のクーデターを起こし、インラック首相は失脚した。

３　バンコク日本人学校について

（１）概要

〈正式学校名〉

泰日協会学校（たいにちきょうかいがっこう）※対日本的な名称として「バンコク日本人学校」を使っている。

〈タイ語での校名〉

โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น（ﾛﾝｸﾞ ﾘｱﾝ ｻﾏｺﾝﾀｲ ｲｰﾌﾟﾝ）

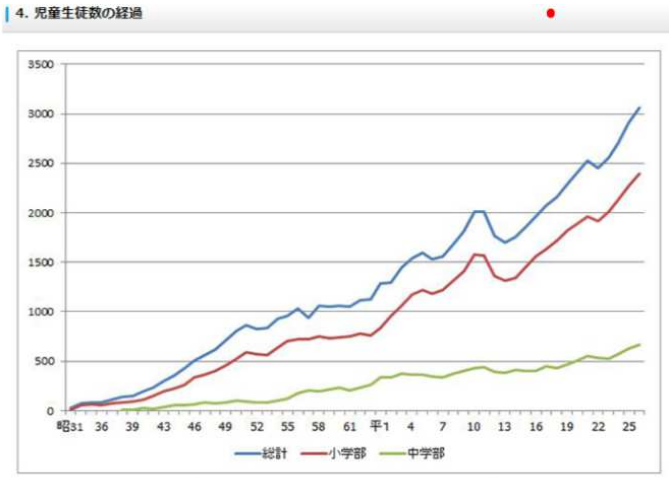
〈英語・校名〉

THAI JAPANESE
ASSOCIATION　SCHOOL

本校は日本国文部科学省在外教育施設認定校であると同時にタイ政府から正式にタイの私立学校としての認可を受けている。対日的に日本の公立学校として通用すると同時に私立学校なので入学金、授業料が発生する。

カラーコピーや画用紙などの文房具は不自由なく使え、教材作りの環境はとてもよかった。また、図書室の蔵書も豊富であり、教育書も充実していた。

児童生徒数は小・中学校あわせて２５年度には２９００人台を超え、翌年（今年度）は３０００人を超えた。児童生徒は年々増加を続け、とどまるところを知らない。（今年度３０６４人〈小学部２３９０人　中学部６６０人〉）。



在籍児童生徒数の年度別推移　平成26年4月21日現在

（２）特色としての授業・行事等

・カリキュラムは日本の公立学校に準ずる。

・タイ語が必須教科。１年生から中３まで主に１回、タイ語の授業がある。

・小６が教科担任制。中学校教諭が配属されるケースが例年多い。中学校教諭が低学年に配属されることもあり、その先生方はかなり苦労されていた。

・中１数学科での少人数制の授業を編成。

・英会話の授業が小３からある。週２の英語圏ネイティブの先生がメインで英語の派遣教員がＴＴとなる授業。

・日本の学校より授業日数が少ないことや、タイ語の授業など授業数も多くなることなどから土曜日の授業がある。学年が上がるごとに土曜登校が増える。

・５０ｍプールがあり、一年中プールの授業がある。５月には５年生が臨海学校を行い、それまでは５年生が優先してプールを使う。

・修学旅行は飛行機。行先は小６がチェンマイ、中２はシンガポール。

・小５は国王の避暑地フアヒンでの臨海学校。全員が５００ｍ泳ぐ。

・全学年現地校との交流会がある。文化交流をとおして言葉の壁を乗り越え親交を深める。

・運動会には平均して生徒児童数×２～３名の保護者や関係者が学校をめがけてやってくる。その数は少なく見積もっても8000 人に上る。

・学芸会がない代わりに合唱が盛ん。６年生は合唱コンクールがあり、中学部は合唱祭がある。中学部の合唱コンクールを小 6 が観賞するので、6 年生はその歌唱の美しさに魅了され自分たちも頑張ろうと触発される。小中一貫校のよいところである。

（3）職員

・文科省派遣教員は通常３年、最長でも４年で本帰国となる。そのほか、現地採用として学校が採用している非常勤講師的な扱いの先生（専任という＝新卒などの若い先生が多い）がいる。タイ語の先生は全てタイ人。日本語ぺらぺら、大学などの専門機関で日本語を学んだ教師がほとんど。英語は語学系企業から委嘱されている英語圏ネイティブの先生が英語の授業を行う。小学部の英会話はこの先生がメインとなり、文科派遣の英語教員が２名ほど配属され、小学部全学年の調整を行い、授業はサブで入ることになる（英語教師としての力が発揮できずかわいそうに思った）。

また、いわゆる校内の環境整備や施設管理などの公務補としての仕事は全てタイ人スタッフが行っており、学校周辺の地元の方が用務員、清掃員として採用されている。その数はおそらく５０人くらいか。現地タイ人の仕事は３つあり、朝早くから出勤し廊下や教室を常にきれいにしてくれている清掃員（通称アヤさん＝シャイで笑顔の素敵な女性が多かった。）、教材の印刷や運動会のテント張りから数百脚に及ぶ懇談会の椅子の設置などの雑務を全て笑顔で要望通りにこなしてくれる用務員さん（熟練の男性が多い＝気さくでサッカー好きな男性が多かった）、そして、セキュリティーを担う警備員（通称ヤムさん）がいる。彼らは警備会社から派遣されており、24 時間勤務し、安全を確保してくれている（時間が合えばタイ人しか行かないようなレアな屋台によく飲みにつれていってくれた。もちろん飲み代はこちらのおごり）。私たち教員集団が行う全ての教育活動はこの地元タイ人スタッフによって支えられている、感謝すべき存在である。

４　３年間の勤務と雑感

私がバンコク日本人学校で過ごした３年間を１年ごとに短い言葉で表現すると、だいたい次のようになる。

〈１年目〉〆切り業務に追われ、生徒指導と「命の次に大事なゲート通過」の関係が理解できなかった１年目。寝不足と奮闘した地獄の日々。

〈２年目〉１年目の反省を活かし、見通しをもって効率的に動こうと考えた２年目。子どもを冷静に見つめ、児童や同僚に

気を配る余裕がでてきた。少しずつ笑顔になった。

〈３年目〉仕事を見渡せるようになる。業務の厳しさの訳を理解し、その大切さを残る年次に伝える努力をした３年目。

（1）バンコク日本人学校的風景

保険制度も交通法規感覚も日本とまったく異なる慢性的な渋滞の代名詞にもなっているバンコクで、外国人である日本人が事故を起こしたらどうなるか、考えるだけでも怖くなる。という理由から、車・バイクの運転は一切禁止。もちろんバイクタクシーの利用も禁止（モーターサイという、最も安い交通機関であり、タイでは当たり前にある庶民的な乗り物である。）また自転車は私が来たころは禁止されていなかったが、乗っていて後ろ指を指されたことがある（後の年次では禁止されたようである）。

車を購入する場合はドライバーを雇うことになる。私は車の購入はしなかったが、車は本帰国の時に高値で売れるので、そんなに損のない買い物のようである。ただ、雇用にかかる給料は年々上がっているようである。タイ人ドライバーは道を良く知っているので、休日に家族で好きなところを旅行したり、タイ人しか知らないような観光名所に行ったりできるというメリットはある。

車を購入していない教員は委託しているバス会社のバス通勤である。児童生徒の登下校がバスは毎日２００台近くのバスが校内の駐車場を出入りしその光景は圧巻である。毎朝担任が欠席児童を確認し、教務に届ける。この届はすべて生徒指導部長に集まり、彼はその日登校している全児童生徒の数を確認して委託会社のスタッフとともにバスの配備を行う。下校時は学年、また曜日によってゲートを通過する時間が異なる、人数は何百人、何千人の単位となり厳しい業務である。

小学部は学級ごとに整列し、ハイタッチをして通過するのであるが、これに遅れると生徒指導部長から指導が入る。昨年までは「命の次に大事なゲート通過」と言われた。日本の学校の場合は通常、重大な生徒指導は放課後行われるものであるが、この学校はそれがバス通学のため出来ない。ゲート通過に遅れたら、3000 人の児童生徒がその一人のために下校できなくなるのだ。1 年目はこれが理解できずに苦労した。指導でも遅れる事が許されないことで、指導が効率的に出来ないでいた。1 度遅れて生徒指導部長と言い合いになった。しかし、話してみて生徒指導は休み時間に行えばいいと助言を受けた。その時は納得できなかったが、やってみるとなるほどと思った。さらに指導時間が短くなるので効率的であった。これがこの学校の生徒指導のやり方だった。よほど重大なことが起こらない限り、休み時間に済ませてしまう（学部、学年をまたぐ場合や特に重大な生徒指導は生徒指導部長が音頭をとった）。

児童生徒がバスに乗り込んだ後は各バスに配備された先生が乗り込み、最終確認を行い、中継無線を持っている担当者に報告する。その報告が生徒指導部長に集約される。こうして3000 人近い児童生徒の所在を確認するのである。一人でも確認できないと出発出来ない。何分でも待つことになる。

だから確認できない児童の学級担任や学年主任は責任重大である。その児童の下校確認をちゃんと確認せずにいるからこういうことになるからである。彼らは教室やサークル先、早退の可能性があれば、保護者への電話連絡など駆けずり回って、いない児童の所在を確認する。それでもいないと生徒指導部長から捜索の放送が入る。これができると全職員での捜索である。ふたを開ければ、たいがい、違うバスに乗っていたり、サークルに行っていたりするのであるが。捜索のかかった子どもの担任や学年主任はその後、生徒指導部長からたっぷりと指導が入るのである。だから下校は担任や学年主任

にとってはかなりプレッシャーなのだ。これが命の次に大事なゲート通過である。なお、この言葉は私たちの次に来た年次からなくなった。「命の次なんてあまりにも厳しすぎる。やめてほしい」という意見が元となった。同感である。

その他は児童生徒は自家用車通勤である。母親や雇われドライバーが迎えに来る。保護者といえども通行証がないと、警備は中に入れることはない。それだけ安全確保として入校制限を厳しく行っている。徒歩通学は原則認められていない。だから、子供達は校内の事は知っているが、学校外周辺には足を踏み入れたことはない。安全という観点からも、学校の外での学習活動は常識的にあり得ないと学校関係者は考えている。

（２）業務について

膨大な児童生徒数を抱えるこの学校では部長制（教務部長、生徒指導部長、第一・第二小学部長、中学部長、特別支援部長など）がとられている。部長は管理職の補佐として、何かあった時は部長会の中で管理職判断に加味される。また学年主任や担任の裏方として、登下校のバス発車やクレームや保護者対応などひたすら事務作業に当たる。例えば運動会では朝から晩まで何千人分の整理券をひたすらちぎって一日を終える先生もいる。子どもの活躍は一切見ることはできない。

本校のような児童数を多く抱える学校は指導体制を組織的に行うことで安全確保や指導の一貫性を保つ必要がある。専任の先生のような初めて担任を経験するような教師もいたので、業務はかなりシステマティックである。児童の安全管理や毎日の通学バスの配車管理、下校時間の厳守など、とにかく〆切り厳守、時間厳守の雑用が多い上に事務仕事がやたらと多い。担任はとにかくそのような業務に追い立てられ、締め切りに追われ、締め付けられるような切迫感の中で必死になって仕事をした。

また、バンコク日本人学校はタイの私立学校として、教員はタイ語の習得が義務づけられていた。赴任初年の教員は、週に２回４時から５時半までの １ 時間半をタイ語の講義に充てなければならなかった。その他に分掌や行事の打ち合わせなどがあり、特に行事が近づくと打ち合わせや事務仕事がふえ、時間のやりくりに苦労した。一つの仕事や打ち合わせに一区切りつけたときに時計を見ると夜１０時ということが毎日のようにあった。それから授業準備に入る。特に初めての学年や教科を持つ教員は大変である。０からの教材準備である。初めてなので気をぬけない。やっと明日の見通しが立った時に時計をみると３時半を回っていたということもざらであった（もちろん金曜日には屋台に飲みに行っていたが）。

●学級経営について

私は幸運にも在職３年間とも、小学部６学年の学級担任及び社会科の教科担任をさせていただいた。社会科は６学年９クラスのうちの６クラスを担当した。

学級の児童は平均 38 人。日本人学校はどこの国でも同じだと思うが、編入・退学が頻繁にある。年間４人ほどが年度途中に本帰国したり、他国に行くために退学したりする。みんな一抹のさみしさを感じながらお別れ会を楽しんだ。また、年度途中で編入してくる児童がいるとみんな目を輝かせた。編入生が男子だと、男子から、女子だと女子から歓声が上がった。

学級では毎日「日記」、「漢字」、「算数」の３つの宿題を出すことが学年共通の申し合わせだった。日記は空きのない中、時間をやりくりしてコメントをしてその日のうちに返した。しばらくすると悩みや質問などを書いてくる子も出てきて、手を抜けない。時間をかけてしっかり書くことを心掛けた。

　そのうち、日記に「書くことがない」という児童や内容が毎日書く内容がほとんど同じといった子が増えると「最近、自分の中ではやっていること」などの「お題」を出したりした。

　日記のコメント書きにはじめは苦労したが、やがて朝のうちに 10 冊、給食の準備をさせながら５冊といつ具合に徐々に要領を得てこなすことが出来るようになった。雑務が重なりコメントができない時はハンコをついて返し、翌日にまとめてコメントを書いて返した。この宿題は子どもに文章力をつけるのにかなりの効果があった。

一年目は、養護学校と中学校での特別支援を主とした経験しかなかった私にとってこのような学級を切り盛りするのはかなりのプレッシャーであった。１クラス３８人をどう動かしたらいいのか。それを考えるだけでも不安だった。

　案の定、一年目は思うような学級経営は出来なかった。私にとっては散々な結果であった。

　私の力量のなさに加えて、２学期の長期間の休校や運動会が中止となったことも拍車をかけた。特に学級の団結を具現させる絶好の機会である運動会がなくなってしまったことは打撃であった。学校が再開しても教師にも子供にも虚無感が残った。そんな中でカリキュラムや行事をこなさなければならなかった。教師はとかく児童を急がせ、子どもの心がここにあらぬまにそれをさせようとした。教師は思うように進まないことにイライラした。

それでも学級経営がうまくいっていればまだよかった。集団の動かし方を全くわかっていなかった。学級の中で特定の子を叱ること多くなり、不公平を感じた子どもから反感を買うようになった。学級の子どもたちの横柄な態度は徐々に全体に広がっていった。その態度に私はたたみかけるよう叱った。このようなやり取りが繰り返され徐々に指導は通らなくなり、私を見る子どもの目は敵意のあるものに変わっていったのである。

　毎日悩んだ。深夜、自宅マンションでたばこを吸いながら階下を見下ろし、様々なことを考えた。今思い出してもあの頃には戻りたくないと思う。そして、受け持った子ども達にはそんな思いをさせてしまって申し訳ないと思う。

「このままじゃいけない」

と思った。

一つ上の年次（派遣された年度の数字をつけて 23 年次とか 22 年次と呼ぶ事が通例となっている。）の学年主任に相談したり、ネットを開いたり、本を読んだりして、どうしたらよいかを考えた。

こうして、２年目は、「何があっても決しておこらない。」という決心をした。社会科の授業は１年間がんばり通せたことで財産となり、２年目はそれをさらに膨らませながら改善した。

こうして徐々に、徐々に軌道に乗っていった。教師側が変わると子どもたちが変わるのだということが絵を見るようによくわかった。

そして、仕事以外の周りのものを見渡す余裕ができてきた。タイ人スタッフとも仲良くなった。休みの日には時々だが日本人居住区ではないディープなタイを冒険するようになった。ぼろぼろの公共バスやボートバス（ルアックロット）に乗って。

５結びに

まだまだ 3 年間をバンコクで過ごしたことの全てを報告しきれていないがこの辺で紙面に区切りをつけたいと思う。

３年間は本当にあっという間であった。その時々は長いと思ったことも何度かあったが、仕事の過酷さに追われながらも、３年間でどうにかそれを克服した充実感と、タイのマイペンライ（気にするな。適当にやろう。くらいのリラックスした雰囲気を持つ言葉）な国民性や街並みに受け入れられ、溶け込みながら３年間を過ごしてきたように思う。学校にいるときは教員としてしっかり業務にあたったつもりであるが、いつも失敗ばかりで同僚には迷惑をかけた。同僚たちはそれをみながら黙って支えてくれた。

学校から出たら、タイ人の一般庶民になり切ろうとした。もちろんタイ人になることは日本人である私には出来ないのであるが、仕事に余裕ができはじめてからは、好んでタイの庶民が住む地域に足を運ぶようになった。

高架下にけして裕福ではない子どもたちが集う空き地で一緒にサッカーをしたり、川の水面に立つ居住群の屋台で鶏肉のスープをおばちゃんに作ってもらい、それをつまみにビールを飲んだり（それがめちゃくちゃ美味しいのである！）、日本人居住区ではない、でもそこから目と鼻の先の垣根を隔てた向こう側のタイ人エリアの屋台でカエルの皮のフライ（ナンゴプという、好物だった）をかじり、タイビール「LIO（＝リオ）」に氷を入れて飲みながら（これがタイの常識的な飲み方）、下手なタイ語でしゃべりあったりした。そこに移り住んだ者はそこに住む人の文化や風習を理解し、心を通じ合わせようとする心が大切だと直感的に思ったからである。

とにかく、いろいろ辛いこともあったが、あがきながらも少しずつ自分のスタイルを作っていくことが出来た。

私生活では日に日に、タイ人の気質やタイ国の歴史や文化にふれ、タイを愛おしく思う気持ちは山ほどにも積もった。本帰国が近づくにつれ「俺は日本には帰りたくない」と本気で思えた３年間であった。